

くすりにおもう

国立長寿医療センター 研究所 池田 恭治

最近、雑誌“医療”が届くと、くすりの開発秘話を読む楽しみができた。個人的には、そのうちまとめて単行本にならないかと密かに期待している。そうなれば是非購入したい。ついでに希望を言わせていただくと、我が国には、超音波診断装置など世界に冠たる医療機器・器具があるので、そうした機器の開発にまつわる（やや工学的な）シリーズの企画も面白いのではないかと思っている。

日本の医薬品の市場は縮小する一方のようだ。医療費削減が声高に叫ばれているせいなのか？ そもそもほんとうに医療費は削減しなければいけないのか、我々がそのように洗脳されているだけで、実は、医療費を取るところからもっと取って公平な負担にしなければいけないのか、よくわからない。政治家や官僚からあまりにも同じことを繰り返し聞かされると、裏に何かあるのではないかと訝りたくなる節もある。一方、海を越えた北米ではまったく逆で、近い将来世界の市場の半分を占めるようになるとの推計がある。くすりも車同様アメリカで売る時代になりつつある。米国研究製薬工業協会（略称ファーマ PhRMA）の最近の報告によると、2006年にFDAから承認を受けた新規治療薬は29種類に上る。1つの新薬開発には、10-15年の歳月と平均8億ドルのコストがかかるが、全体の投資額は552億ドルにも達し、開発パイプラインには2,000種類以上の新薬候補が並んでいるそうだ。日本の医薬企業もこれらが正念場である。

“もの”だけでなく、最近日本からの“頭脳”流出にも拍車がかかっている。たとえば、検索王のGoogleは、数学やコンピュータ科学に秀でた学生をいち早く見だし、いろいろなサポートを提供して、挙句の果てに好条件で引き抜いていくとのこと。そのうち、優秀なお医者さんもどんどんアメリカに引き抜かれていくかもしれない。うかうかしてはいられない。それまでには、雑誌“医療”も国内の医療情報だけでなく、日本発世界あるいは外国発日本着の、広く人々が関心をもつ、知っていて損のない、役に立つ医療情報を提供できるような方向をめざしたいものである。

優秀な頭脳もさることながら、昨今は学力低下そのものが問題だ。今年から、いわゆる“ゆとり”教育を享受した若者が大学に入学するという一方で、大学側も、彼らがどっと就職する会社側も警戒心を強めている。かつて数学オリンピックで優秀性を誇った日本も、近年は中国やインドに大差をつけられている。平均レベルで見ても上の方のレベルでも、国全体の学力レベルが落ちていることは間違いなさそうだ。折りしも昨日は、小学6年と中学3年の全国学力試験が久しぶりに実施されたとかで、ある地方の教育委員会がこれをボイコットしていることが話題になっている。試験そのものは、易しい骨抜きレベルらしい。世界で起こっている大きな動きと、日本の置かれた位置を考えたとき、こんなことを“教育問題”のネタにしている場合ではないと思うのだが・・・